

経済危機の克服と 日本・アセアンのパートナーシップ

経済広報センターは2009年10月26～29日、アセアン加盟5カ国の有力英字紙から5名の記者を日本に招聘した。記者たちは期間中、政界や民間の要人との面談・インタビューを行い、日本の経済や政治、社会についての理解を深めた。

最終日の10月29日にはシンポジウムを開催した。各記者がそれぞれ発表した後、パネルディスカッションでは、産経新聞社の千野境子特別記者・論説委員がモデレーターを務め、アセアンと日・米・中の関係などについて意見交換を行った。参加者は約100名

参加記者

インドネシア	リヤディ・スパルノ『ジャカルタ・ポスト』紙	副編集局長
マレーシア	ハーデヴ・カウル『ニュー・ストレーツ・タイムズ』紙	コラムニスト
フィリピン	アーノルド・テノリオ『マニラ・タイムズ』紙	経済部長
シンガポール	ウィリアム・チュング『ストレーツ・タイムズ』紙	編集委員
タイ	ノパクン・リムサマルンパン『ネーション』紙	編集委員

■中国との関係について

スパルノ 中国からの投資が増加してきており、両国の経済関係は重要になりつつある。従来は、日・米・韓からの投資が大半を占めていたが、現在は日・中の2国が中心となっている。ただし、中国は民間案件にしる、ODA（政府開発援助）案件にしる、安値で受注して後から条件を変更しようとするので、注意が必要である。

カウル マレーシアへの直接投資、また、輸出先としても、中国が最大であり、そのプレゼンスは年々高まっている。

テノリオ 中国からのODAが増加するなど、関係は強化されつつある。

チュング 中国は、日本など先進国の優れた部分を模倣して、それを国内で展開するパワーがある。中国と付き合う上でのメリット・デメリットを十分に把握して、上手に付き合っていく必要がある。戦略的には、当面は「アセアン+6」により中国の突出を牽制し、各国のバランスを取っていくことが望ましい。将来的には中国を含めたオープンな共同体を目指す必要がある。

リムサマルンパン 中国の利点をうまく活用することが重要である。「アセアン+3」よりも、「アセアン+6」の方が、各国が均衡するのでよいと思う。

■米国との関係について

カウル 最終消費財の需要は、依然として米国と欧州にある。中国は中間財の需要が中心である。その意味で、引き続き米国市場は重要だ。米ドルは今後も基軸通貨としての役割を果たすものと思われる。

テノリオ 米国はフィリピンにとって最大の貿易相手国であることに加え、米国で働いているフィリピン人からの送金はフィリピン経済の成長を賄ってきた。将来的にも、米国は主要な同盟国であり続けるであろう。

■日本とアセアンの パートナーシップについて

スパルノ 中国が台頭してくる中、日本と中国とのバランスをどう取るかが重要である。ADB（アジア開発銀行）を例に挙げると、今後、増資を行う際に出資比率をどうするか、これまで日本がずっと独占してきた総裁のポストをどうするか、といったことが課題となる。東アジア全体の枠組みについては、「アセアン+6」がよいのではないかと。

テノリオ 日本には優れた技術を生かして、環境分野の技術移転、人材育成をさらに進めてほしい。■

（文責：国際広報部主任研究員 北井優康）